

地図帳への導入は具体的に、どのような“扉”を、どのような“言葉かけ”で開いていったらいいのでしょうか？

東京学芸大学名誉教授 次山 信男

指導観や人柄がみえる導入の“言葉かけ”

新学期を迎えると、子どもたちは新しい教科書を手にします。とくに4年生は「地図帳」が加わり、いろいろな意味で胸をときめかせているのではないのでしょうか。

次の①～④は、先生方の地図帳への導入の“言葉かけ”について、その回答を頻度順に示したものです。

- ①「どこに、どんなことが出ているか、一通り全部見ておこうね。これからの勉強に役立つからね！」
- ②「どのページが気に入ったかな。地図帳って面白いね。見れば見るほど面白くなるよ。先生も大好きなんだ！」
- ③「この地図帳は国語の辞典と同じなんだよ。社会の時間だけでなく、いつでも開いて使えるようにしましょう！」
- ④「私たちの県や市を見つけましたね。これは地図帳といって、日本や世界のようにすが地図で出ているのですよ！」

これを見ると、その先生の指導観や人柄がみえて「なるほど！」と思います。ですから、どの“言葉かけ”が最も適しているか、一概に決めることはできません。仮に、④②①③の順で“言葉かけ”を構成してみると、かなり厚みをもった導入が展開されるように思うのですが、いかがでしょうか。

「地図の約束ごと」は、いつでも立ち戻れるページです！

しかし、多くの教室では、まず最初に「地図の約束ごとのページ」(p.1～10)を開かせ、方位、記号、縮尺、等高線などの学習からスタートさせ、それも軽く扱うのではなく、かなりの時間と精力を使ってすすめているのです。

「地図の約束ごと」は「地図の理屈」です。ですから、一部の子どもたちには興味をもって迎えられることも確かでしょう。しかし、多くの子どもたちにとっては「地図って、なんて面倒で、難しいんだろう」という印象を与えかねないのです。

もちろん、「地図の約束ごと」を軽視してもよいわけではありません。これまで身近な地域の観察や調査などを十分に楽しんできた子どもたちの“絵地図の心”には、新しく手にした地図帳に立ち向かう“力”がすでに備わっているのではないのでしょうか。

もし、そうであるならば、まず「地図の約束ごと」がわかって、地図の中身を読んでいくという筋道よりも、むしろ地図の中身を子どもらしい感覚でとらえ、そうしてとらえたものから表現上の約束ごとの存在に気づき、とらえた中身をより確かなものにしていくという筋道を考えていきたいのです。

ですから、地図帳のはじめにある「約束ごとのページ」は、子どもたちがいつでも立ち戻れ、どの学習にも開かれているページとして位置づけたいのです。いかがでしょうか。